

第81回 シチズンシップと自律性

IT生

奇妙に思うかもしれないが、写真は、ロシア名物のピロシキとラズベリージャムである。



自宅近くに昔ながらの商店街があって、そのロシア料理屋で購入した。4年ほど前にできた店は一坪ほどの店舗で、テイクアウトのみの販売をしている。店は小さいながら、メニューはほかでみられないほどロシア風である。調理と販売は、文字通り熊みたいなロシア人のいちゃんが一人でやっている。日本語はたどたどしいが、背丈のわりに、上目遣いで背中を丸めて、いつもニコニコしているので、時々通うようになった。ロシアによるウクライナへの侵攻後、ひさしぶりに顔をだしてみた。当然のことながら熊君は、それまで見たことのないような暗い顔をしている。こちらの顔を見て、少し無表情だったが、すぐにいつもの笑顔（目は笑っていなかったが）になった。注文し、お金を払い終わり、ふときいてみた。

「たいへんだねえ」（私）「あっ、僕は政治関係ないから」（熊君）「プーチンさんどうしたもんかねえ」（私）「僕にはここ（店）しかない」（熊君）「店がやっているかどうか心配していた」（私）「それは心配ない。僕の仕事はロシア料理を喜んでもらうことだけ」（熊君）…。

ちなみに、一坪店のオーナーはウクライナ人の女性だ。日本で通訳をしていて、ロシア料理を紹介したくて店を開いた。熊君いわく、「ふたりとも、ここの仕事を大事だと思っている」らしく、お互いの国の話は一切しないらしい。

政治的に欧州をはさみ不安定な間柄だからこそ、お互い日々の生活を守ることの大切さを知っているということか。ということは、熊君との一瞬の会話（あまりに動揺するので）だったが、ありありと感じられた。気の毒なこと、このうえないが、世界一（外形上）安定した国ながら、日々の生活をかえりみない（平凡さの尊さを知ろうとしない）われわれにとっては、熊君の態度は示唆的である。

師いわく—

災難にあった人を第三者の立場から見て、事後にとがめだてするほどやさしいことはないが、はたして自分でそういう種類の災難にあわないだけの用意が完全に周到にできているかという、必ずしもそうではないのである。

（令和4年4月）